

ドキュメンタリー200

from 関西 第1回

新連載

酒鬼薺薇聖斗とその両親よ
そして我われの住む社会よ

遺族の叫びを

少年が実行犯となる重大事件がひん発するのは、社会が乱れている証拠といわれる。2000年に入ってからだけでも、佐賀のバスジャックや、岡山の金属バット殺傷、大分の一家殺傷などの事件が続いている。10月に少年法が改正される事態にまでいたった三連の流れの発端といわれるのが、97年に神戸でおきた「酒鬼薺薇聖斗事件」だ。このとき、当時小学校6年生だった土師淳君と同4年生だった山下彩花ちゃんが犠牲になり、「酒鬼薺薇聖斗」を名乗る当時14歳の中学3年生が逮捕された。一見、決着したかにみえるこの事件はまだ終わっていない。我われの社会が、まだじゅうぶん教訓をくみ取っているとは言えないからだ。今回、彩花ちゃんのご遺族からお話をうかがうことができた。いまいちど、この悲惨な事件について考えてみようではないか。

酒鬼薺薇事件の起きた街は無機質なニュータウンだった

神戸市の中心街、三宮から市営地下鉄で20分。「名谷（みや）だに」駅で市バスに乗り換え、3分ほどで須磨ニュータウンに入る。

11月に入ってから、時ならぬ残暑が続いていた。汗ばむような陽気の中を歩いていると、あの暑かった日々が蘇ってくる。

ここを初めて訪れたのは1997年5月下旬、神戸市須磨区の友が丘中学の正門に子どもの頭部が置かれるという猟奇的な事件が起きた直後だった。

以来、足を運ぶたびに、このニュータウンが無機的に感じられた。庭とガレージのある一戸建て住宅、しようしやな中・高層マンション、林立する団地、それに学校が整然と区

画されてひとつの街を構成している。道路は整備され、街路樹もある。丘陵や公園もあり、街には緑があふれているのに、落ち着かない。

というのも、街にはコンビニも、銭湯も、喫茶店すら見当たらない。駅前のショッピングセンターと居住地とが分かれているため、このニュータウンには息をつける空間が少なかった。まるで、ハンドルの遊びのないクルマのような危うさをこの街に感じたからだ。

その1か月後の6月28日には、事件の容疑者として、このニュータウンに住む、当時中学3年生の男子生徒が逮捕され、3月16日に相次いだ女兒連続殺傷事件も自供した。その少年Aは、神戸家庭裁判所の審判で医療少年院へ送致され、法の上では一応、決着をみた。

酒鬼薺薇聖斗が破壊した平和でく普通の家庭の姿

あれから3年あまり、かつて恐怖と不安に脅えた街は、事件が起きる前の日常生活を取り戻している。

わずか10年で人生を終えねばならなかった山下彩花（あやか）ちゃんに通っていた童が台小学校でも、この日、休日とあって少年野球の試合が行われていた。子どもたちに熱い声援を送る母親たちの表情には、わが子の写真が出ることで犯人に狙われると、子どもたちに向けたカメラを手でさえぎった、かつての癡癡のいろはない。

あの凄惨な事件はこのまま特異な者による特異な事件として風化していくのだろうか。そんな思いを抱き

殺害された山下彩花ちゃん。最後の運動会でのスナップ（小学校3年時の撮影）

Report: 矢野宏 (ジャーナリスト: 大谷昭宏事務所)



土師淳君が殺害された通称タンク山から見た須磨ニュータウン。



淳君の遺体が置かれたタンク山。

ながら、生前 彩花ちゃんが4年間通った通学路を歩いて、山下さんの自宅を訪ねた。

小学校にほど近い団地の4階 奥の部屋に仏壇があり、その横には彩花ちゃんが使っていた学習机が置かれ、椅子には赤いランドセルがかけられてあった。

彩花ちゃんは86年11月9日生まれ。いま生きていれば14歳 中学2年生になっているはずだが、母 京子さん(45)の心の中に生きている彩花ちゃんは小学4年生のままだ。

「彩花は足が細いことを気にしてましてね。いまでも足の細い子や、赤いランドセルを背負った子を見ると、思わず、『彩ちゃん』と声をかけそうになってしまうこともあるんですよ。」

居間にあるピアノは、彩花ちゃんが事件に巻き込まれる数時間前 京子さんに弾いて聴かせてくれたものだという。

「あの日、『もう1回、弾いてあげる。お母さんの好きな曲は何?』って何度も弾いてくれたんです。もうすぐ永遠のお別れになることを知っていたかのように、いっぱい思い出を残してくれました……。そのひとつひとつを、京子さんは気丈に語りつつも、最後には涙声に変わる。

「あれは何年前だったかな、近く

の交番のお巡りさんから電話がありましてね。彩花ちゃんが片方の手袋を拾って届けてくれたから、誉めて上げて下さいと言われたんです。帰って来た彩花に『いいことしたんやねえ』と言ってやると、あの子、こんなことを言ったんです。『だって手袋を落とした人も困ってるし、落とされた手袋もかわいそうやし』って。それを聞いた時、ああ、なんて優しい子に育ってくれたんやろと。」

彩花ちゃんの思い出話は尽きない。

「あの子は小さい時からおもちやのいらない子で、自分で作り上げていく楽しみを知っている子でした。主人の誕生日にはビックリ箱をプレゼントしようと、牛乳パックで作ったんです。でも、うまく飛び出さなくて本人はショックだったみたい。負けず嫌いな完璧主義者なところが、あり、『もう一度、作り直す』と続けたまま……。」

犯人を殺してから自殺する憎しみが生きるを支えられた

運命の日——1997年3月16日を迎えた。その日は日曜日だった。

少年Aが残した犯行メモによると、自宅近くの公園で友だちを待っていた彩花ちゃんに近づき、「手を洗う場所を知りませんか」と尋ねた。その公園から20メートルほど先に彩花ちゃんを通う竜が台小学校がある。普段の日曜日なら、学校は閉まっているが、この日はカーニバルが開かれていた。それを思い出した彩花ちゃんは、「学校にならありますよ」と答え、わざわざ案内してあげたのだ。

正門へ続く遊歩道を歩きながら、少年Aは隠し持っていたハンマーとナイフのどちらの凶器で襲うか迷っていたという。正門から5メートルほど手前で、少年Aは、前を歩いている彩花ちゃんに声をかけた。

「おれが言いたいので、こつちを向いて下さい。」

彩花ちゃんが振り返ろうとした瞬間、少年Aは持っていたハンマーで殴りかかった。

左後頭部の辺りを打ち据えられた彩花ちゃんは、その場に沈むように倒れた。少年は容赦なく、2回、3回とハンマーを振り下ろしたという。

救急センターの集中治療室で、彩花ちゃんは意識を失ったまま眠り続けた。医師が「まだ生きているのが不思議なくらいなんです」と言うほど、頭蓋骨は陥没していた。

そんな医師の予想を覆して懸命に生きようとした彩花ちゃんは1週間後、こぼれるような笑顔のまま、悠然と旅立ったという。

「本当の意味の『生きる力』というものを、私はあの子から教わりました。」

とはいえ、10年間一緒に暮らしてきた娘が突然殺された悲しみと寂し

さ悔しさは自身の中で抑えようもなかった。

「そのころは、犯人を殺して死ぬことしか考えられませんでした。憎しみこそが、生きる支えだったように思います。周りの誰を見てもねたみばかり。きれいなものを見ても憎らしいし、どんな食べ物も、おいしーと感じられませんでした。地獄のようなドロドロした日々だったのです。」

犯人が憎い、でも、誰かわからない。やり場のない怒りはやがて自分自身に向けられた。

「なぜ、あの時にもっと早く帰ってやれなかったんだろう。買い物に行かず、ずっと一緒にいれば、彩花は死なずにすんだのに」という自責の念、かけがえのない娘を失った悲しみから、京子さんは何度も自殺を考えている。

「電車を待っている間も、『いまホームから飛び込めば、この悲しみから逃れられる』とか……。先のことなど、考えていないから怖くないんです。まったくの極限状態でした。」

そして6月28日の夜、テレビのニュース速報で、京子さんは、少年Aの逮捕を知る。奇しくも、その日は、彩花ちゃんの百か日法要の前日だった。

だが、それは同時に、新たな苦難の始まりでもあった。それまで見た



彩花ちゃんが殺害された現場。正面奥が通学していた竜が台小学校。

ことも聞いたこともなかった少年法という壁が、山下さん夫婦の前に立ちちはだかったのだ。

非公開の少年審判では遺族は意見を言えなかった

なかでも、京子さんが大きな疑問を感じたのが、「少年審判」だった。いっさいが非公開で、加害少年とその両親、裁判官、弁護士以外は同席できず、被害者の遺族が意見を述べられる場も与えられなかった。

京子さんは、神戸家裁の調査官に「同席できないのなら、せめて彩花の写真を少年とその両親に見せて下さい」と訴えた。

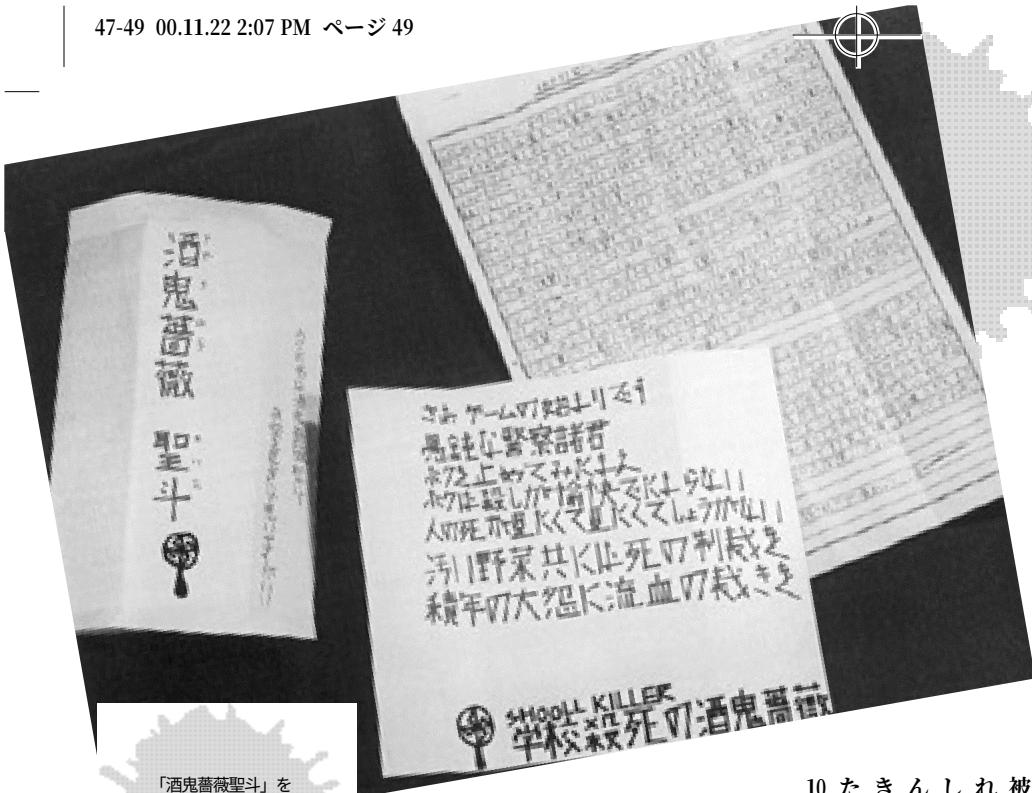
「こういう事件がなかったら、娘はいまも生きているのよ、ということとを伝えるには写真を見てもらうのが一番だと思ったんです。わが子を突然、奪われた親が、どれほど辛い思いをしているか、犯人の少年とその両親にわかってほしかったんです。」

しかし、その切実な願いさえも聞き届けられなかった。加害少年の人權を考慮し、更正の妨げにもなるという少年法の理念によるものだった。思わず、京子さんは声を荒げたという。

「被害者の人權はどうなるんですか。遺族は声を上げることができないまま、一生を終えねばならないのですか。」

少年法の壁はそれだけはない。審判が、いつ始まり、いつ終わったのかも知られなかった。少年Aが医療少年院送致になったことも、京子さんはマスコミの報道を通して知ることになる。

それに、親としては一番知りたい



「酒鬼薔薇聖斗」を名乗る少年が、逮捕前に神戸新聞社に送りつけた手紙。犯行を“ゲーム”と称している。

ドキュメンタリー2001 from 関西

こと――「わが子がなぜ亡くなったのか」ばならなかったのか」さえも教えてくれない。それを知ろうと思えば、民事訴訟を起すしかないのだが、裁判を起すことは、その費用はもちろんなかなりのエネルギーを使い、時間も費やさねばならない。にもかかわらず、賠償金という金額だけが前面に出てくるため、ねたみもあるのだろう。世間の見る目は、「子どもを亡くしたかわいそうな人」という無責任な同情から「子どもの命を金にかえるのか」というようなさげすみの色へ一転する。

いま最も必要とされるのは 他人の悲しみがわかる社会

「せめて、審判内容を知らせてほしい」「加害者の人権というのなら、被害者もせめてそれと同等にしてほしい」という京子さんら少年犯罪に巻き込まれた被害者たちの願いは、この10月に衆議院で成

のか、どのように殺されたのかさえも教えてくれない。それを知るために民事裁判を起すと、「死んだ子どもの命を金にかえる」など、的外れな非難が集中する。その一方で、少年Aは更正という名のものと、医療少年院で国から全力をあげて治療してもらおう。こんな理不尽なことはない。だが、それが少年犯罪の被害者を取り巻く状況なのだ。

立した少年法改正には届かなかった。

「私個人としては、なにも、加害少年をもっと厳罰にすべきだと言っているのではないのです。せめて、被害者側の遺族の声を反映してほしいのです。少年であらうと、悪いことをしたら、つぐなうのは当たり前でも、少年法では、少年が犯した罪を自覚できないのはおかしいと思うんです。更正というのは、申し訳ないことをしたという気持ちを持つことが、その第一歩、誤解を恐れずに言う、苦しみことから始めないと、つぐないにはならないし、その少年のためにもならないのではないのでしょうか。」

さらに、京子さんは、「少年法という制度だけではなく、被害者に対する社会の在り方そのものを変えていかなければ遺族の気持ちは救われない」とも言い添える。

「こんなに辛い被害にあったのに、被害に遭うのは特別な人だという偏見があるように思います。世間にとつては、あくまでも対岸の火事なんです。もしかしたら、自分の子が事件の当事者になっていたかもしれないと、相手の悲しみを想像できる社会にならない限り、いつまでたっても、被害者は孤立したままではないでしょうか。」

周りからは、「嫌なことは早く忘れなさい」と言われるが、何気ないその言葉が辛かったと、京子さんは振り返る。事件のこと、娘がこの世にいたことも忘れてはくはないというのだ。

山下さん夫婦には、少年Aよりひとつ年下の長男がいる。同じ世代の少年による犯行は、京子さんの心にも微妙な影を投げかけた。

「私自身も、息子のことをすべてわかっていて、かといえ、そうは言い切れない。何を考えているのかわからなくなる時もある。ふと、少年の親はどんな教育をしたんやらか、という疑問がわき起こったのです。」

その両親と初めて会った時、2人はうちひしがれた様子で、山下さん夫婦に土下座して泣きながら謝った。京子さんも驚愕するでもなく、ただただ泣いた。だが、2度、3度会った時に、父親が少年Aのことを嬉々として話したり、母親の言動にどこかふてぶてしさを感ずるようになる。

ついには「何かが違う」と感じるようになったという。「少年の母親が『うちの子(少年A)はええ子やったんです』と言われるので、どんな風にですかと尋ねたら、『私が買い忘れに気づいて、あの子に頼んだら買いに行ってくれたんです』と。ああ、少年の気持ちを読み取れてへん、見た一面でしか判断してないなあ、と、『何かをしてくれると、いい子』というように、わが子への愛情のかけ方が条件つきだったのではないかと思います。」

事件を風化させてはならない 社会全体で受け止めるべき

居間に差し込む日差しが斜めにかしいで、光は少し濃くなっている。ふと落ちた沈黙を破り、京子さんが「私、夢があつたんです」と切り出した。

「彩花が結婚して出産する時、ずつと付き添って、手を握り締めてやりたい、背中をさすってやりたい」と

思っていたんです。そして、赤ちゃんが生まれたら、『かわいいやろ。あんたもこんなにかわいかったんやで。子どもを生むことは感動的なことやろ』という言葉をかけてやりたかった……。」

そんなこの家庭にもある、ささやかな夢さえも、一瞬にして奪われてしまった。

彩花ちゃんの仏前に手を合わせてからの帰り、京子さんの言葉を思い出していた。

「今回の事件で、子どもを生むのが恐ろしくなったという人もいました。でも、子どもを生み、育てることは素晴らしい感動的なことを知ってほしいと思います。」

だから、援助交際とか、小さな命を簡単に殺してしまつたりする女の子もいますが、もっと自分を大事に生きてほしいと思うんです。自分を大事にできない人は他の人も大事にできません。

彩花が事件に巻き込まれてから死ぬまでの1週間、命というものが、どれほど荘厳な営みをしているのか、教えてくれました。

自殺についてもそう。私も自殺を何度も考えましたが、思いとどまってよかったと思っています。私が抱いた悲しみを、主人や息子に味あわせることになるわけですから。

片方の手袋を拾い、その手袋が迷子になってかわいそうだからと交番に届けた彩花ちゃん。そんな心優しい彩花ちゃんを奪った、この事件から、私たちの社会は何を学んだのだろうか。

それが、わずか16時間28分の国会審議で成立した少年法改正だけだとしたら、彩花ちゃんの霊は浮かばれない。